

静 中・静 高
関 東 同 窓 会

会報4



T. NAKAMURA

巻頭のことば

会長 宮澤次郎

「わたしは関東同窓会は今年三年目を迎え、ますます盛になって参りました。」

各期幹事の協力に依る先般の総会はまことに愉快に且盛大に行われましたし、ゴルフ会・ハイキング会等、親睦の催しも世話人のご活躍で同窓相集い俱に心から楽しむことができました。まことに喜ばしい事と感謝申し上げております。

さて、わたくしたちの母校は来百年周年を迎えます。百年の歴史は良き伝統となつて生き続け、かつてわたくしたちを育てた如く、これからも岳南健児を育んで行く事でしょう。

それを思います時、わたくしたちはこの節目を祝い、記念事業を盛大に、意義あらしめるよう力を合わせなければならぬと存じます。

今回の会報がこの点を取上げ、「ふるさと特集」と致して居りますのも、その意味と考えます。ささやかな努力ではありますが、何等かのお役に立ちます様、心から希つて居る次第でございます。

郷土色豊かに

五十二年度総会開かる

於日比谷三井ビル大会議室

六月三日関東支部総会が、来賓に吉川晴夫母校々長、鈴木敏夫先生、鈴木与平同窓会々長、高橋孝三同副会長、望月静雄百周年事業委事務局、鈴木真十中部支部幹事更に恩師古茂保正先生を迎えて日比谷三井ビル大会議室で賑やかに行われた。

今回は郷土色（郷土食？）同窓会とあつて出席何と四百二十名、さしもの会場も一杯となり会場係委員をハラハラさせる程の盛会となつた。

此の日定刻前から実行委員は会場、模擬店、名産品コーナー等の準備に汗だくであつたが、特に女性会員が率先してトッパンムニア社及び大雄社派遣の女性社員と会報・名簿・お土産等の袋詰作業や受付やらに大活躍で会を華やかに彩り、トッパンムニアのプラスバンド演奏と共に雰囲気盛りあげた。

会は昨年同様島井滋夫氏（67期

フジテレビアナウンサー）の司会によつて開会、宮沢会長挨拶、高橋本部副会長挨拶、吉川母校々長挨拶に引き続き議事に入り、五十二年度事業報告、同会計報告、同監査報告並に五十二年度事業計画同予算について役員会提案を可決、懇親会。

先づ当日の最先輩二十三回卒業の池田錫氏の音頭で乾杯、恩師古茂先生の挨拶と進み、要務途中で馳付けた鈴木与平同窓会長の挨拶に次で先般猛運動の結果再交付を受けた野球部の甲子園優勝旗レプリカの紹介と当時の選手上野精

三氏、国友正一氏等の挨拶に至つて雰囲気は最高潮となつた。

会場のテーブルには予告の通りにえきりおでん、黒はんぺんフライ、蕎麦すし等々皆懐かしい静岡名物が並び、模擬店ではおでんやフライの屋台実演をやつて居ると言う趣向で、往時の悪意に帰つた会員諸氏は或はおでんに青海苔、ダシ粉をまぶして頬張りながら久闊を叙し、或は黒はんぺんフライを

ソース漬けにしてバクつきながらの先般後輩交歓風景等々場内は静中静高色の熱気に満ち、予定の二時間は忽ちにして過ぎ、例によつて名応援団長井出多末夫氏の音頭若手応援団長望月静雄氏の指揮で岳南健児を高らかに歌い上げて散会した。

又、受付室には石部屋の安倍川餅、田尻屋の山葵漬、東海軒の鯛めし等々名産品コーナーが開設されて此の方も大繁昌であつた。

今回の総会は会員の郷土ノスタルジアと物価高に対する会費問題から出発した企画であつたが、会の設営を自営で実行するに當つて会場借用の為に五〇回山田喜志夫氏の尽力があり、静岡名物実現の為に在京六十七回生成岡英彦・榎原由三・朝比奈正三三氏の奔走と静岡の同級生桜井昌一郎・織田三喜彦・永井滋惟三氏の献身的サービスがあつた事及びこの案を企画し推進した奥野副会長の情熱を見逃す訳に行かないであろう。結果は三千円会費でデザイン手拭と山葵漬のお土産付では安いとの好評大盛会となつたのみならず、この企画実行過程そのものから静岡と東京の接近という効果を生んだとも考えられ、今後の発展が楽しみです。

(月見里記)



総会風景

於日比谷三井ビル大会議室

百年祭迫る！

母校創立百周年

記念事業準備すすむ

私達の母校、静岡中学・静岡高校の創立百周年は昭和五十三年に迫りました。これまでもお知らせしました様に、静岡ではその記念事業を有意義、且、盛大に行う為に実行委員会を作つて準備を進めています。

百年という歴史を一つの節目として区切り、整理し、まとめる事は矢張り大きな意義を持つて居りましょう。又私達自身にとつても、今流行のルーツ等という言葉を用いずとも、ともすれば忘れがちな白らの原点を省みる機会としても価値あるものではないでしょうか。

丁度今私達は来る一年の計を樹てる時期でもあります。出来れば来年の計画の中に式典参加の日程を取り、少くとも事業資金の一端を荷い度いものです。

そこで式典まで既に一年を割つた今日、更めて静岡の同窓会事務局に運動経過と現状について報告して頂きました。

これまでの経過

51・5・22

合同役員会（理事・評議員）を同窓会として母校同窓会館で招集し、その席上百周年に対するこれまでの経過を報告し、百周年記念事業実行委員会を設置して実行委員長に同窓会長を推薦すること

算については、以前から校史資料委員会を設置して、資料の収集を行つて来たのであり、限られた人数の資料委員の外に同窓会役員全員を協力委員として委嘱して、更に一層の資料収集に努力することとを約したのである。

こうして百周年に対する意識を同窓生に高揚することになったのである。

51・7・16

百周年の組織としては5月に大構を決めたのみで規約とか施行細則までは決定してないのである中で、東、中、西の広域支部に更に協力を要請すべく、同窓会正副会長及び事務局の三者で百周年に対する意志統一をしておくべきであるというところで、ここに同窓会正副会長及び事務局による三者の会合を「三役会」と称して、毎月定期的（第三土曜）に会合をもつことにした。

41・7・18

中部支部総会（名古屋）開催を機に、今回は統一された考えで、名古屋に関西・中部の広域支部役員にお集り願ひ百周年への協力を要請したところ、両支部とも全力を挙げての協力を約してくれたのである。

51・8・24

関東支部を訪ね、支部首脳部に協力を要請し、支部の意向も充分反映すべく長時間懇談した。

51・10・9

総会の為の、同窓会理事会を開催し、その席上百周年記念事業実行委員会に切り替えて、百年祭についての規約、施行細則を承認し規約に基づき、副会長三氏がそれぞれ総務・行務・募金の委員長になり、第一回の各委員会を開くに至った。委員については5月22日の席上、委員の委嘱を会長に任されている為、その後各委員では委嘱状を発送してあったので、第一回の各委員会を容易にもつことができた。この委員会は顔合せが主体だったといえるが、次回の委員会子定等も検討され、各委員から活発な意見も出、百年祭に取り組む姿勢はかなり熱心であった。各委員会も進んで行く中で、種々の問題を検討しつつ前進することになった。

以下、総務・行務・募金の委員会別に要点を提示する。

51・10・9 第一回委員会

51・10・9 第一回委員会

顔合わせ、意見交換

51・10・20 第一回百年史刊行小委員会

委員会

表紙画を片沢銈介氏に依頼

百年史は寄附金の見返りには一切せず

51・11・17 第二回百年史刊行小委員会

百年史を大日本図書印刷所に決定、五千円で五千部発行、各期で割当消化の方針

51・12・15 第二回総務委員会

記念施設・記念品・応援歌・百周年記念としてレブリカの検討、市民へのサービスとしてN響を招聘

52・1・19 第三回総務委員会

記念式典、N響招聘の日程検討、予算の検討・記念碑作成を決定

52・2・17 第四回総務委員会

総務委員の追加委嘱をし、小委員会に分担、法人の寄付免税を検討、レブリカ受領方法検討

52・3・16 第五回総務委員会

レブリカ受領報告、駿府会館日程の検討、各小委員会の報告

百年史小委員会会合

52・4・23 百年祭実行委員会

総務委員会の経過報告、承認

52・6・15 第六回総務委員会

百年史の現状報告（B5版・一二〇〇ページ）分科会報告、記念館についてアンケート

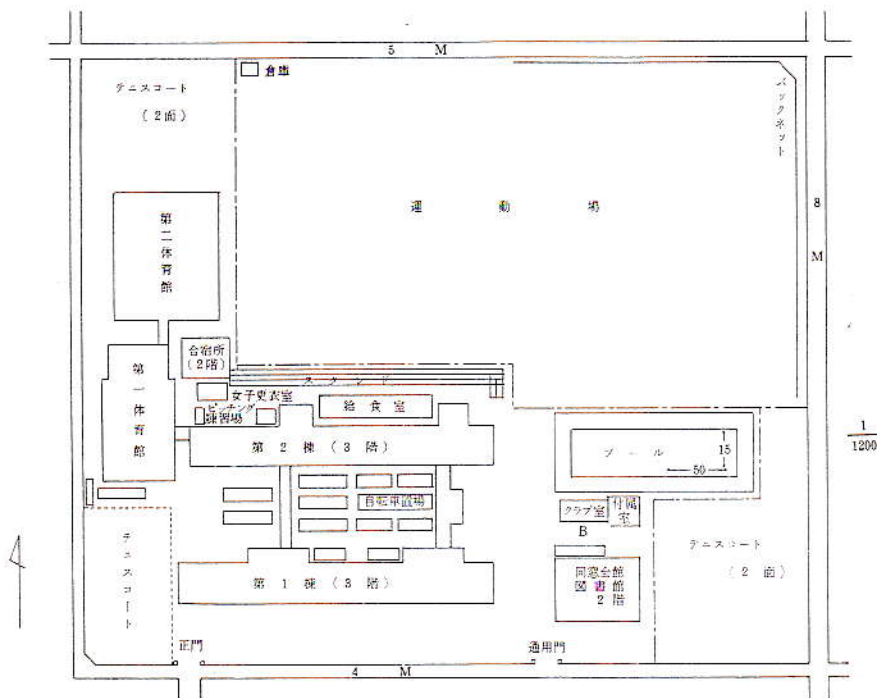
52・9・21 第七回総務委員会

百年史序文の件（題字、序文執筆）

母 校 今 昔

私達の静岡静高の沿革と現状を紹介する為に学校から特に学
校要覧を提供して頂きました。(前頁の沿革概要を含む)

静岡高等学校配置図



校地総面積	38,945㎡55(11,781坪)	県有地	33,312㎡89(10,077坪)
建物敷地	15,407㎡53(4,661坪)	借用地	5,632㎡66(1,704坪)
運動場敷地	22,170㎡02(6,706坪)		
その他の敷地	1,368㎡(414坪)		

在 籍 生 徒 数

52.5.1現在

建 物	延 床 積	延 床 積
校舎 1 棟	延 3,616㎡755(1,094坪)	延 1,200㎡575(368坪)
校舎 2 棟	延 3,226㎡46(976坪)	延 1,054㎡55(319坪)
第 1 体育館	延 1,191㎡97(360坪)	延 1,057㎡85(320坪)
第 2 体育館	延 2,518㎡84(762坪)	延 1,220㎡22(369坪)
水 道 施 設	延 981㎡00(297坪)	延 520㎡00(157坪)
図 書 館	延 318㎡64(96坪)	延 159㎡32(48坪)
台 宿 所	延 236㎡90(72坪)	
給食室・食堂	延 66㎡43(20坪)	
女子更衣室		

学 年	男女別	男	女	計
1 年		299	85	384
2 年		805	77	882
3 年		805	80	885
計		909	242	1,151

百周年事業資金の募金状況

〔11月1日現在〕

期	4~9月	10月	11月	累計	期	4~9月	10月	11月	累計	期	4~9月	10月	11月	累計
16~34	840,000	30,000	15,000	885,000	53	1,000,000	200,000	0	1,200,000	74	0	0	0	0
35	0	0	550,000	550,000	54	1,200,000	0	0	1,200,000	75	0	0	0	0
36	0	0	300,000	300,000	55	700,000	0	0	700,000	76	500,000	5,000	0	10,000
37	435,000	20,000	0	455,000	56	0	865,000	0	865,000	77	207,000	3,000	0	210,000
38	540,000	0	0	540,000	57	0	0	0	0	78	0	0	0	0
39	410,000	170,000	10,000	590,000	58	0	0	0	0	79	0	0	0	0
40	725,110	105,000	0	1,030,000	59	0	1,200,000	0	1,200,000	80	15,000	0	0	15,000
41	30,000	40,000	0	70,000	60	0	600,000	400,000	1,000,000	81	0	0	0	0
42	800,110	0	0	800,000	61	0	0	0	0	82	0	0	0	0
43	1,000,000	0	0	1,000,000	62~63	965,000	0	0	965,000	83	0	0	0	0
44	1,300,000	0	0	1,300,000	64	0	0	0	0	84	0	0	0	0
45	500,000	510,000	260,000	1,270,000	65~66	0	0	0	0	85	0	0	0	0
46	0	10,000	500,000	510,000	67	0	0	0	0	86	0	0	150,000	150,000
47	600,000	0	0	600,000	68	1,000,000	400,000	0	1,400,000	87	0	0	0	0
48	15,000	0	0	15,000	69	0	0	0	0	88~93	1,065,000	20,000	10,000	1,095,000
49	0	0	800,000	800,000	70	0	0	0	0					
50	510,000	0	0	510,000	71	0	0	400,000	400,000					
51	1,575,000	0	50,000	1,625,000	72	0	0	0	0					
52	1,200,000	0	0	1,200,000	73	0	0	0	0	計	16,827,000	4,178,000	3,405,000	24,410,000

ふるさと

「郷のかをり」から

月見里 得知郎 (53回)

私達が静中に入学した昭和八年頃「静中郷土研究会」略して郷研というクラブ活動が出来て、校友会の文化運動部の中に入っていたにもかかわらずも仲々盛に活動したものでした。

重に感ずるのは私だけではないでしょう。そこで、「郷のかをり」から二つ程記事を紹介させて頂くことにしました。

「瓦の一片より発見した奈良時代の古寺片山廃寺物語り」は、当時地理歴史の教官であった大沢和夫先生(そうです。「……マグマが吹き出す。デー……。こういう形がユニーク……」の懐しきカラス先生です)が名古屋新聞に執筆されたものを「郷のかをり」第十二号(昭一〇・一・一五)に転載したものです。

この頃、「郷のかをり」誌上でも「片山廃寺は駿河国分寺に非るか」等という論文が紙面を賑やかしていたのですが、現在では国分寺説が定着している様で、それだけに発見当時のエピソードは四十年を隔した今日ロマンの香りすら感じさせるではありませんか。

然し、結構、研究実績もあがっていたと思われる。今日、その会誌「郷のかをり」を母校の資料室に発見して非常に懐しく、且貴

・二八)に投稿されたもので、五二回生の戸塚広吉氏が当時の真面目一方の静中生徒の中で特に校旗旗手として、ほとんど信仰に近い様な若き感激を以て校旗を護持し又研究しようとした記録です。

現在の感覚からは滑稽に感ずる人もあるかも知れませんが、この時代の岳南健児達が校旗こそは静中の伝統の象徴として大真面目に神聖視していた事がうかがわれると思います。

尚、特に原文のままとし、旧仮名遣いになって居ます。御了解下さる様御願ひ致します。

瓦の一片より発見した

奈良時代の古寺

片山廃寺物語り

大沢 和夫

昭和五年六月十五日、いい天気でした。私はふと道祖神にさそはれたのか歩きたくなくて有度山の方へ行つたのです。若い中学生と一緒に朝に漫談るって行つたので

す。青田を渡る風を涼しいと思ひ夏蟬のなきはじめた有東山の松林を見ながら、やがて静岡市を出はづれて久能街道より大正寺道に入りました。このあたり去年の十月一日新しく市となった大谷村宮

川です。

宮川から片山へと歩き続けました。丁度昼食時になったものから、とかく戦と言うものは腹が減っては仕方がないといふのは孫呉の兵法にある——かないか知りませんが、とにかく昼食を食べる事にしました。それでとある店の前で休息する事にしました。

×

×

生徒がどやどやと井戸端へ手を洗いにきました。私はほつねんと店の腰掛にかけてゐました。所へ生徒が瓦を持って来ました。瓦といつても今ある様な鼠色をしたあれではありません。白いもの、赤いもの、紫がかつたもの等色々あり、厚さも厚く仲々かたいものです。そしてその瓦の面には格子形が、裏には布の目がついて居ります。こういう瓦は大正平安時代以前のもので、私達は布目瓦と総称してゐます。それを沢山拾つて来ました。

×

×

一体是をどう思はれますか。私は寺でもあったのではないかと思ひ廻しました。尤も始めは誰か拾つて来た(この少し南に清泉寺霊といふ瓦焼場がありますから)位に考へて居ましたが、余り多い瓦なので考へ直したまでの事です。

では何か寺の名残でも無いかと

店の人にたづねてみますと茶畑の中に大きい石があるとの事です。是はしめた、それこそ寺の礎石に違ひないところ思ひ、生徒に茶畑の中を探してもらひました。たちまち畑の中に躍り込んだ生徒は「ありました」「あつた」と云ひ乍ら軽く茶畑を飛び越して「ここにも」「あそこにも」……この時位うれしかった事は、かなり長い私の研究生活でもあまり経験した事がありません。それで落着いて礎石の配置を調べて見ますと、南北には正しく五つの石がならび、その間隔も十二尺、十六尺、十六尺、十二尺と規則正しいのです。この状態では確に昔のままですからうれしくなりました。

×

×

ではこの寺はいつ頃のものかと云ひますに、名も分らない位です。瓦片の中から花瓦一箇を得ました。それを故足立鉄太郎先生の御尽力により関野貞博士に見ていただく折を得ましたが、博士は奈良時代の後期との御鑑定でした。それでいつ創設されたかは解りませんが、奈良時代の後期には敵たる大伽藍であった事だけは確です。それも小さい瓦の一片から解った

事なのです。

記録が一切ありませんから名も解りませんが、この地方の人々はこの寺址の地を「ショウゴインヤシキ」と呼んで居ます。浄光院とか常居院とかの名かとも考へられますが、不明瞭ですからこの寺を片山庵寺と名づけて居ます。

ただ此処で考へたいのは国分寺の事です。御存知の通り長谷町の国分寺址といふ所には何も奈良時代の遺物はありませんが、この片山庵寺は瓦と礎石とを持って居ます。では片山庵寺こそ国分寺ではないかとの疑も起るのですが、今の所否定する材料も肯定する材料もありません。

今、小鹿、堀之内、片山、宮川と有度山の西麓を南下しますと、片山を出はづれた時左手に白山権現の森が見えますが、そこで茶畑の中へ道より一問入って下さい。厳然たる礎石を見る事が出来ませう。ただし布目瓦は最近人が拾つて了つたものですから、余程注意しないと見つかりません。ただその瓦に国分寺を暗示する様な文字でもないかといふ点に御注意願ひたいのです。

古人が「玉碎すれども瓦全を恥ず」と云ひましたが、瓦全でもな

い瓦礫の一片から奈良時代の寺址を発見できた事は珍らしい事と思つて居ます。

静中校旗研究資料

五二回 戸塚 広吉

静中校旗についての研究をして見たいといふのは不肖僕が昨年四月名譽ある静中旗手に任命されてからの事であつた。それは第一には我々は静中生徒として本校に籍を置きながら本校の歴史についてほとんど知らない。殊に校旗について知つて居る者はほとんど居ないと言つて良い。

故に校旗についての研究を完成し、これを発表して我々の校旗に対する認識を深め、それによつて校旗に対する尊崇の度を更に高めんと考へたからである。第二には校旗を近くに拝する事は一般の生徒にはほとんど不可能な事である故に、この研究は自分に与へられた特別の任務であると考へたからである。そして第三に、さらに僕の研究心をふるひ立たせたものは、校友会誌、郷のかをりで発表された、大沢先生の椅子による学校の歴史の考察である。かくの如き状態に置かれながらも僕は二期には或る理由で研究をやる事が出来なかつた。三学期には必ずと

思つてゐたが卒業を前にしてのいそがしさや或る事情の爲研究はおろか筆を取る事も出来ない中に原稿締切日は過ぎてしまつた。

然しすでに原稿締切日はとうに過ぎてしまつた今になつて「若し今このまゝ僕が卒業してしまつたならば果して何時になつたら誰か校旗に対する研究を発表して一般生徒の校旗に対する認識を深めるであらうか」と考へると自分がこのまゝ卒業してしまふ事は自分の責任を果さないやうな気持がして自責の念にかられて来た。然し今となつて研究をするといふ事は原稿締切日を遠く過ぎ、卒業を一ヶ月後に控へた僕として不可能な事だ。然し自責の念は僕をせめてゐる。それで此処に校旗制定当時の校友会誌中の記事を紹介し、それをやゝ敷衍し説明して諸君の校旗に対する認識を新にし、以て諸君の中の誰かが校旗に対する研究に従事すべきヒントとしようと思ふ。

校旗発表式

予て東京に注文したる(註・東京三越呉服店、尚、以後(一)内に入れてあるものは僕の註記と御記(憶下さい)本校旗は愈々出来ま

次に知事

「本日校旗の発表式を挙行するに際し諸子に告げんとする所は義勇奉公の本旨なり。この本旨は諸子が現在及将来に於て最心を注ぐべき所にして臣民の務を尽すに於て説いて怠るべからざるものなり。殊に本日は我家祖先以来奉仕する出雲大社の祭日に相当するを以て本校生徒は大国主命の国土経営の鞠躬尽力せられたる忍耐とその忠誠とを瞻仰して益々義勇の精神を養成し將來有為の臣民たることを期すべし。」

と述べられ、次に倫理科主任として山本先生の愛国愛校の演説、大林先生の祝詞あり。終りて各隊の分列式あり。謹厳勇壯に式を終れり。本校が校旗を製造せし所以は昨年十一月徳川従一位公東京へ御移住の際職員生徒一同へ金〇〇〇円下賜相成りたるを以て(金額は特に記載せず)永く記念としたるなり。又同旗の柄は当市国手柏原学而氏(誰か御存知の方はありませんか)の寄贈にかゝる槍を用ひたり。茲に附記して深く謝意を表すといふ。又当日の旗手は五学年生徒崎成男(校友会誌二十五周年記念号によれば第十四回卒業生)明治三十二年三月農商務省技師とあり)首席の故を以て選出せ

先づ僕が諸君に問ひしよう。「校旗制定の年は何時か?」この間に答へられる人はおそらくないであらうかと思ふ。明治三十一年七月十八日発行の校友会雑誌第貳号の中の記事に校旗制定の事がくわしく出てゐる。

「予て東京に注文したる(註・東京三越呉服店、尚、以後(一)内に入れてあるものは僕の註記と御記(憶下さい)本校旗は愈々出来ましたるを以て五月十四日(校友会誌二十五周年号には四月十四日とあるが五月十四日の方が正しいと思ふ)発表式を挙行せられたり。当日午前七時生徒一同、三年以上は武裝、玄關前に整列し(當時は西草深町に校舎があり静岡県尋常中学校と称した)千家知事臨場せらる。校長進んで校旗を旗手に授け、一同敬礼の後校長(吉田良春先生)は左の如き意味の演説をなせり。「先に徳川従一位公(慶喜公より?)本校に寄贈せられたる金員を以て本校の校旗を調製し、本日その発表を挙ぐ。抑々校旗は我が静岡県立静岡尋常中学校を代表する所のものにして、永遠に我が校の名譽を伝ふるものなり。生徒は年々出入し職員時々移動を免れざるも唯校旗は校の名譽を荷うて不朽に伝ふるものなれば職員及生徒の現在及将来の事業は一に校旗の表彰する所なり。吾々は諸子と共に奮勵し物語の御趣意を尊奉し我校を天下一の中学とならしめこの校旗の光輝をして益々燃然たらしめんとするなり。」

らる。名譽と言ふべし。

以上の如く記載されてゐる。尚明治三十一年十二月廿三日発行の校友会雑誌第参号には校旗に関する会計報告がしてある。

校旗調製費

細に調製したる校旗の費用の詳細左の如し。(特に以下を略す)
又校友会誌の二号には挿絵が入つてゐる。

以上の如き次第によつて校旗は定められたのである。参考までに

言ふと、昨年なくなつた小林武先生は明治三十一年三月の御卒業であつたから校旗の制定されたる年に御卒業になつたわけである。又僕は三十九代目の旗手であるわけである。(もつとも制定当時より現在の如く旗手が確定してゐたかどうかは疑問であるが)

僕は校旗につき更に具体的になる研究(?)即ち校旗の巾、縦の長さ、星の大きさ、竿の長さ等を測

つたならばもつと校旗について諸君の知識を深める事になつたかも知れぬが、然しメジャーをあてゐる事はすでにそのものを單なる一箇の無生の物体として見てゐるやうな気がして、我が日夜崇敬してゐる校旗には遂にさうする事は出来なかつた。その点はおゆるしを願ひたい。校友会誌中校旗の柄は繪

を用ひたとしてあるが、その柄に

は「伊賀守源包道」という銘が記されてゐる。僕はこの方面については全然何の知識も持ち合せてゐないのでこの銘について説明することが出来ないのは残念であるが

沼館先生に御聞きしたらわかる事と思ふ。又校旗の義勇奉公の字はどちらの向から見ても右側より義勇奉公の字が書かれてゐるので一方の面の字の裏には同じ字が書かれてゐない。

この字も慶喜公の筆になつたものであると言ふ事を聞いた事があるが事実かどうか知らない。校旗の徽章についてはすべて校友会誌五十周年記念号に於て追憶談として鈴木正練先生の述べられた所であり且、郷のかをりに大沢先生が発表されたから略すことにする。我々校旗について最も特筆大書すべき事は、かしこくも

聖上陛下、静岡県下行事の御時御親閱の光榮に浴した事である。諸君の中には校旗を拝する時校旗の先の槍の穂先になつた所にリボンの如きものがたれ下つてゐるのを注意された人が居るであらう。このリボンこそ、その時の光榮を永遠に伝えるべき御親閱記念のリボンである。

其他校旗につきて記したい事は

多くあるが僕のしつかり事実として述べる事の出来ない事があるから略すこととする。これによつて

校旗の研究をされたいと思はれる方は制定当時の様子を知るために本校のその当時の先生方即ち鈴木正練先生、夏目秋蔵先生、土佐光一先生等にお尋ねしたら良いかと思ひます。僕も御援助を惜しまないつもりです。以上の如く僕のこの稿は研究と言ふのでは無くたゞ

資料を紹介したにすぎませんがこの稿によつて諸君が我が校の校旗につきての認識も深め更に諸君の中の誰かが校旗の研究を完成されて一般生徒の校旗に対する尊崇を深めるべき一助となれば幸ひと存じます。尚この稿に於て校旗の尊敬を害するが如き言辭がありましたならば直ちに取消すつもりである事を附記致します。

おそらくは僕が、靜中生徒として、郷のかをりに投稿するのはこれが最後であると思ひます。郷土研究会の無窮の発展と諸君の御活動とを祈り併せて微力ながら今後の御援助を惜しまないつもりである事を申し上げてお別れの言葉に代へます。では御健康で。

指導員記 柏原学而氏は慶喜公の侍臣で歴史学・考古学の造詣が深

かつた方である。本文は適材を得た名文として推賞する。会員のみなでなく校友一般にも読んでもらひたい。(大沢)

伊賀守源包道と云ふ人は刀鍛冶であるが、槍もなか／＼上手に造

今川義元のこと

庵原 悌次 (54回)

会報四号は「ふるさと特集」をやろうという編集局の企画で、私も久し振りに幼時の静岡を思い出して見た。

「ふるさと」の静岡は自分の思い出ならいくつもあるが、いたずらに昔の感傷にふけるのでは、読む方こそいい迷惑だ。それより静岡の名を挙げた人物の紹介などはどうだろうかと思つた。なぜかといふと、幼時は英雄豪傑崇拜主義が瀾漫してゐて、私も静岡には天下に名だたる人物は居なかつたのか探したものだ。

教育された面でも、いかに人間として生きたかより、歴史上の人間は歴史の表面に現われた人ばかりが重要視され、それらを支えた底辺である庶民については省みられなかつた。いきおい、どこの生まれか分らぬ山田長政など引張り

る。大和の文珠鍛冶の系統で新刀鍛冶では上手の方で切味もなか／＼よい。校旗に之を使用されてゐるのは実に快心の至りである。

出でて来て、海外に雄飛した郷土の英雄などと称讃した。

むかし大浜公園のプールへ泳ぎに行くと、公園に近い道路の左側にある畑の中に、象に乗った長政像の雄姿を見て幼い胸を躍らせ、少年クラブに連載された悲劇的末路を辿る長政父子を画いた「日本人オイン」とかいふ小説に若い血

一般的には、静岡に隣居して絶大な権力をふるつた徳川家康などが密には果人と言えないまでも静岡の有名な人であり、駿河・遠江・三河の守護であつた今川義元などは世間で認めるところであるが、不思議と静岡の人は、前者は陰險な狸爺いとして、また後者は、暗愚な殿様で、凡庸な大将の標本みたいに言われて、あまり自慢しがらない。

七、十八、十九、二十年と三河・遠江・駿河三国に相次いで検地を行ない、支配体制を強化していった。年貢の歳入地の名主はすべて今川氏の部将から任命された代官の管轄下に入れ次第に今川氏直属の武装化された農民体制を編成していった。

天文二十三年七月、義元は、西に兵を出せば東の北条氏が背後をついてでてくるようでは不安なので、太原雪斎と相談して、今川義元・武田信玄・北条氏康の三者が駿河国善得寺(富士市)に会談して講和した。世にいう「善得寺会談」は晴信の女を氏政に、氏康の女を義元の子氏真に嫁することにによって和睦した。三国同盟は義元の女が晴信の子義信に嫁ぐなど、人身御供の犠牲のうゑで結ばれた。ここで義元は軍事的にみても中央進出の態勢を整えることに成功した。

戦国大名の名だたる武将のうち、今川義元ぐらい正しくその人物評価がなされていない人物は少ない。「集覽廻聞記」は、「義元は総髪で、齒はおはぐるで公家衆の顔をした」というし、「武功雑記」は「義元は武將に似合わず、足は短く、胴長く、一軍の將にふさわしからず」と酷評している。

これらの人物評は最近「歪められた義元評だ」といわれるようになってきた。

「今川記」ですら、今川歴代の当主を語りながら、義元の代を多

略する時、社寺や都市の焼土化も辞さないという戦法をとったのに比べ、義元はその土地を破壊する戦法をとらなかった。こんなところ

添になつて、公事万端の指図をして人々に太原雪斎がいるが、老齢であるから明日の命もはかり難いお人。雪斎に万一の事があつたら家老の誰がその後の面倒をみる

ことができましようぞ」といっている。

雪斎の死後五年、永禄三年(一五六〇)五月一日、後見役として雪斎にかわる人物を得ないうちに義元は、三・遠・駿三国の將兵に西上の進撃を命令した。総勢二万五千の兵力だったといわれる。

五月十日、早くも駿府から先発隊が、十二日になると義元の本隊も出発した。めざすは尾張の織田信長だ。信長、時に二十七歳、義元四十二歳の分別盛り。最前線にあたる鳴海笠寺付近では、すでに小ぜりあいを始めたことが、いち早く駿府に伝えられた。

五月十五日、義元は岡崎に入り、杏掛で織田信長へ総攻撃の命令を下した。松平元康(後の徳川家康)は織田方の丸根の砦にせまり、今川の宿将朝比奈泰能は鷺津の砦に攻め入り、本隊義元の軍も兵を進めて桶狭間の北方、田楽篠間に入った。

陰暦五月十五日は今でいう六月中旬の梅雨期、むし暑いという時ならぬ雷鳴を伴った豪雨が今川の陣



今川一族の菩提寺の一つ 静岡市大岩の臨濟寺

九代氏輝は法名臨濟寺殿、用山玄公大居士と称し善得寺に葬られたが、のち臨濟寺が菩提寺になったと記されている。幼時の記憶にある臨濟寺は、やはり昔、駿山麓で仕掛花火を打上げた当時の記憶にある古びた感じがよい。

たしか、静中の頃だったと思うが、臨濟寺を見学に行つて、家康が今川の庇護のもとで、太原雪斎に学んだ時のものといわれる粗末な机のあった部屋を覗いたのを思い出し、一場の夢と過ぎた往時を偲びながらこの一文を書いた。

×

×

く語っていない。この原因の一つに永禄三年(一五六〇)五月、田楽篠間で不算をとり、織田信長のため、あたら四十二歳の男盛りの生涯を閉じたことがあげられる。

他の多くの戦国大名が他国を侵

「甲陽軍鑑」に「今川義元の介

る

静岡市町名の由来

青木 静男 (59回)

大都會という砂漠の中で、ふとした折に同郷者とめぐりあったりそこまでゆかなくても、なにかの刷り物などに故郷の市や町の名を見いだしたとき、なんともいえない懐かしさと歎びを味ったことは誰でも一度や二度はあるだろう。

幼い頃から耳にしていた町の名前は、そのころの楽しい思い出や悲しい思い出と結びついてすぎ去った昔の夢にもう一度ひきもととしてくれる。今度の同窓会誌はふるさと特集ということであり、それに因んだいろいろな話のついでに、

岡市内の町の名前をいくつかひろってその由来をたづねて見たい。

この面では市内在住の鈴木雄蔵氏が深い研究をされており、「町名の由来」という本も各島屋から出している。すべてをとりあげたのでは大へんな数になる。静岡がもと城下町だったことから武家屋敷の屋形町など城に関するものは見当がつくし、職業に因み呉服類の販売は呉服町などに説明しなくてもわかるようなものは省き、面白そうなのだけを選んだ。

会誌に学術論文でもあるまいし多少の主観や冗談もまぜて書いて見る。順序は「静岡」と「長谷町」をのぞき全くの不同である。町名の由来を折角説明してみても、大火や空襲による区画整理などや住居表示の実施にともない、既に失われたものや、失われてゆくものがあるのは淋しいことだが、これも時の流れで仕方あるまい。

静岡

日本人を倭(やまと=大和)民族と称ぶ。倭の文字は「やまと」「しづ」「わ」などとも読む。昔アイヌ人の住んでいたこの地方、小梳平野の丘、即ち賤機山のふもとに倭文布(シヅリ)を織る倭文布部たちが移り住んで、狩猟を主とする非生産的なアイヌ民族と物々交換を行なって仲良く生活していた。倭文布とは、櫛や麻を利用して織った布、倭文布部とはこれを織る技能をもつ職人、倭文機とは織機のことである。静岡も古くは織物の産地であった。元服織村は絹織物の、元麻機村は麻織物のできる地としてこの名があった。

倭は賤に通ずる。このように由緒ある倭文布もいつしか賤の文字と代り、賤機山や賤機村の名となった。だから賤機山は元来「倭機山」と書くべきものである。

慶応四年、徳川家達が宗家をつぎ、駿府を居城と定めたとき、老臣たちはこれを機会に従来からの駿府の名を何か新しいよい名に改めようと相談し、賤機山の名に因み賤が丘と決めようとした。

しかし、駿府学問所頭の向山黄村から「いかに賤機山に因むとはいっても賤しい丘ではどうか?それよりも賤を静に、丘を岡に代え静岡としたら」との申出があり、一議なくこれに決った。即ち倭が賤と変りその賤が静となっていたまの静岡の市名県名となったのである。私の名は、静岡で生れた男の子だったので静岡とつけられたのだそうであるが、この場合は賤男のほうがあたっているのかも。

長谷町
母校のある町だ。この地には昔駿河の国庁の庁屋があった。「ちようや」であるから長谷の文字を当てはめて、これを「はせ」と読ませたのだという。ほんとに、ほんと?「はせ」はないが、全く知らなかつた。

丸子

とろろ汁で有名な「まりこ」から行こう。広重の東海道五十三次の絵には「鞠子」と書いてあり他の書物の中には「満利子」「満理子」「麻理子」などとも見える。なにやら女の子の名前を思わせるが、なるほど「丸」という文字は「まる」「まろ」とは読んでもふつう「まり」とは読まない。旅人が耳で聞いた音にとづき自分に感じた文字を勝手に当てはめたわけ、昔の人たちは好んでこの字を「まり」と読ませている。

ついでに「用宗」は戦国時代以前には「持舟」と書かれていたという。

宇津ノ谷

もとは「内屋」と書いたといわれる。これは狩猟に因む名前前で、その語源は「兎路」(うじ)即ち兎の、広い意味では獣の通り路という意である。昔の人たちはここに待ち伏せて兎や猪などを捕った。あわせて、これらの獣を「打ち」「射ち」捕ったので、「うつち」や「うち」になったのだともきく。

先日、知人の遠縁にあたるという娘さんの結婚式に招かれた。静岡の出だとのこと。どこかと聞いたら宇津ノ谷だという。このところ由来づいてるので「あ、狸が出たところですね」といったらえらく叱られた。今ではトンネルも三つで高速車がスイスイ、往時の面影は偲ぶ由もないという。

安倍川に因んで
いまも市内には「安西」「安東」を頭文字とする町字名が沢山残っている。それは安倍川の西と東の地域を大別して名前をつけたことによるものである。

慶長十二年、徳川家康が駿府城に隠居する以前の安倍川は、賤機山の麓をひと廻りして、いまの大岩臨濟寺前に出て、それより浅畑沼に注ぎ、巴川に沿う地域を流れ清見潟に注いでいた。

ついでに巴川という名の起り。往時は水量多く、ところどころの堰の下流あたりで「うずまき」して、その様子があたかも巴のようであったからという。なお巴川の交流、横雄川の堰の水が流れ落ちていたところに「水落」の名を産んだ。

「籠上」とは、安倍川の激流が賤機山の麓に撃突して土砂を洗い流すのを防ぐため瑞竜寺の裏山附近に沢山の蛇籠を設けたことからこの地の名となった。このあたりをまた「籠の鼻」とも呼んだ。

大宝の昔、安倍市が開かれたといわれる今の静岡市の西南附近を「川辺」という。「安倍川のあたり」の地というほどの意か。「か

わべ」などと読んだらダメ。私の生れたのは「川辺三友町」。

「川越町」とは江戸時代、安倍川が渡渉越であった関係上、旅人たちは止むなく川越人足の手を借りて渡河せねばならなかった。その人足や川越の仕事をする役人らの住んだ地としてこの名がある。

七 間 町

今の商業は特殊なもの以外は自由の開業できるが往時は特許商人制度であり、これを「二座」といった。「座席」つまり「売場」という意である。米座、油座、茶座、魚座、塩座、綿座等数え上げれば数々ある。そしてその商品の主なるもの七種類を挙げてこれを七座と呼んだ。今川氏時代より徳川氏初期にかけた駿府の豪商は呉服町一丁目の絹商友野宗善で、人びとはこれを友野座と呼んだ。

その友野氏は七座の長として代官屋敷を賜ったから彼の住むところに七間町の名を産むに至った。理窟をいえば、七座つまり七軒の長の住む屋敷ということから見れば七軒町と書くべきだろうが、それをいまでは七間町と書く。

七間町といえは呉服町とともに市内きつての繁華街である。私にとっては小学校のころの通学路でもあった。電気館、立花館などと

いう「活動」をやるところがあった。世の中が今のような風潮であったなら下校の帰途にでもきつとのぞいていたにちがいない。

梅 屋 町

これは町内で旅館屋「本陣」を営んでいた人の屋号が町名となったものである。この町は七間町から横にはいった所で、昔は「横七間町」とも呼び、お茶屋があったから「茶屋町」とも呼ばれた。

この町に梅屋太郎右エ門という旅宿があった。慶安四年、由井正雪は、江戸表の総大将として丸橋忠弥を残し、金井半兵衛らを大阪に向わせ自らは一部の先鋒隊を率いて駿府に下り久能山に立てこもった。天下に号令しようとして七月二十四日夜駿府に着き、茶屋町梅屋太郎右エ門方に投宿した。しかしこのとき既に江戸表では陰謀が発覚し、正雪ら一行の投宿先を詮索していることが明らかになった。翌朝町奉行所に出頭を求められていたが、仕度にとよせて捕方を待たせ自刃した。

梅屋町の名はこの梅屋太郎右エ門の屋号に因むものであるが、その梅屋は謀反人を泊めた罪をとられて間もなくとりつぶされた。この町には父の友人が住んでいてよく暮を打ちにゆくのについて

いったが、お目あてはその女の子と遊ぶことで、暮がもつとながびけばよいのにと考えたことを覚えてる。

伝馬町・人宿町

駿府における旅行者の宿、即ち旅館屋敷町は伝馬町であるが、人宿町は一般旅行者を対象とする宿屋町ではなく旅商人を泊める宿屋があったからこの名となった。

本通りと新通り

慶長十二年、家康が駿府城の大拡張工事を行なった際、安倍川の水を薬科川に合流させたが、このため手越より府中に渡る渡頭をいまの本通りの下流に移した。これに従って新たに「新通り」を設けたためこれ以前の東海道の本通りは新設の新通りに移され江戸時代の東海道はこの新通りが本道となり、本通りはその裏街道的存在となった。なお、いまの「本通り」は昭和八、九年の頃安倍川橋に直通するように路線を拡張変更されたもので江戸時代の本通りではなく三百年を経て再び本通りが東海道の重要路線に戻ったのである。

居住者に因んで

「土太夫・平屋・藤右衛門・江川・新ヶ谷各町」それぞれ土太夫・平屋某・藤右衛門・江川太郎左衛門・新ヶ谷右近が住み、屋敷が

あったから。

たわいない理由で

「井宮・神明各町」それぞれ村社井宮神社・神明宮が奉祀されていたからによる。

「水道町」安倍川一番水道の根元にあり、市内の用水はここからとりいれられていた。

「若松・末広・豊原・春日各町」慶事を寿ぎ、将来の発展を祈念して。

「日出・旭・栄各町」市の日の出に当る位地にあるなど、日の出の勢いをもって繁栄することを期待して。

「泉町」むかしこの辺は清い泉が種となって流れていた。

「鳥見町」小鳥が沢山集まる所という意で、この附近でカスミ網を張って鳥を捕ったという。

「相生町」町民相ともに町の発展を期することを念じて。

「音羽町」音羽山清水寺の名に因んでとった。

「黒金町」駅の近く。鉄道はいくまでもなく、列車の主要部分には黒金つまり鉄材でつくられていたから。

異色もの

「桔梗川」その昔、徳川家康在城当時、カリシタンの信者千人の首を斬った時、その血がこの川

に流れ込み川水が桔梗の花のようであったから。

「緑町」この地は上足洗の小字青木であり、その氏神のあるところを青木の森とよんでいる。住民は新町名をきめるとき、この青木の名と離れたくないと思ったが、市内にはすでに青木町などあり、外来者を迷わすものになることをも考えた。町役員は知恵を借り青と黄色で緑となり、緑は青より出て青よりも更に美しいからとこの名になった。

アイヌ語によるもの

賤機山の麓にアイヌ民族が住んでいたことは先にちよっとふれたが、アイヌ語から出たと思われるものも多い。

①有度はオトク(突出)から転じたもの②ヤチ(沼沢)転じて谷津に③ヨコツ(横内)は鹿の集まること④クサベカは渡舟場を意味して草深に⑤断崖の沼沢地がクツヤチで沓谷と⑥フチャ、ウン、ナイは獵人の小屋の谷で草薙のもとといった具合。

町名の由来について書き出せばきりが無い。また学問的なことをいはいはじめると論争のもとになるので、このような説もあるという軽い意味で記されたものも多いことをおことわりしておく。

やぶきた

上田 尚 亮 (79回)

茶業は静岡の代表的な産業であります。全国の五割の五万トンを生産し、七割近く仕上加工している。これは気候風土がお茶に適しているだけでなく、また牧之原にみられるような明治維新後の血のにじむような開墾などともに、一生を「茶」の発展につくした人々がいたことを忘れてはならない。

その一人に「やぶきた」という品種を世に出した杉山彦三郎氏がいる。「やぶきた」(煎茶用、茶農林六号)。茶の品種といえば、「やぶきた」といわれるほどで、全国品種茶園の八五%を占めている。杉山彦三郎、「やぶきた」がなかったならば、今日の茶業の繁栄はなかったといわれる。彼の胸像が駿府公園内にあり、その業績をたたえている。

杉山彦三郎氏は安政四年七月五日、静岡県安倍郡有度村中吉田一五(現静岡市)に生まれた。家は十五代もつづいた土地の漢方医で、かたわら農業と造り酒屋とを兼ねていた。彦三郎本人は「学問があまり好きでないで、医者のはうが弟にゆずり、茶業に携わること

にした」といっている。彼は「優良な製茶は良好な生葉でなくては得られない」という信念で、茶の品種改良に情熱をかたわけていた。

明治十年ごろから、スタートをし、明治三二年にメンデルの法則が再発見され、品種改良への応用が実現し、彼の経験と感による品種改良も一段と能率化した。百年前、大きくなっている茶の木を掘り出し、そこへ集めてきた茶の木を植えたり、暇さえあればどこかまわす茶の畑の中を歩きまわるときよきよと日を光らせてめぼしい木を探し廻わっていた。そんな姿をみて「いたちの杉山」というニックネームをちょうだいした。

茶畑に入って、茶の葉の色沢・形状・枝の節間の長さ、さらに生の葉をかんで味をみる。甘みを感じるのを残した。(あまりに葉をかんだために歯をわるくしてしまつたと述懐している)

こうした基準と良い経験から生まれる直感が大きく働いて次から次へと新しい品種を育てた。その

数およそ数百種といわれる。「やぶきた」「こやにし」「ろくろろ」「やえは」の四品種がそれぞれ農林省登録品種に採用された。

彼は選抜した種子を中林という地名の竹やぶを開墾して播種し、その実生のなかから二個体を選抜し、北側をやぶの北だから「やぶ北」とし、南側を「やぶ南」とした。「やぶきた」のほうがいよいよ

五四回各期便り

紙面の都合で各期便り欄に掲載できないことをお詫びする。

今回から五四回生を一人ずつ訪問し、その後の様子を話し合つて昔を思い出そうとするにしようと思ひ、第一回は同じ町に住む平林一郎君を訪ねることにした。

ある晴れた日曜日の一日、十条駅前へ登る三階建鉄筋コンクリート十条診療所に平林君を訪問した。

二階の応接室で待つ間もなく、昔に変わらぬ童顔で彼が現われた。早速一問一答に及ぶ。

平林君は一年の二学期、二組に東京から転校して来たことを覚えていた。人力車夫のかぶる縁がピンと張った学帽の貴公子然とした風貌と府立四中ということに威圧感を感じたものだった。

で、二アールの茶園をつくったのは昭和二年のときであった。

中生で樹勢が強く、多収で品質がすばらしく、強い香気と優雅な滋味が特徴である。現在、国や県の茶業試験場や民間育種家で品種改良につとめているが、「やぶきた」以上のものが出ていないのが現状である。(参考文献 杉山彦三郎翁伝・静岡県茶業会議所編)

「僕の生まれは芝で、父が営林署長として静岡へ転勤したので、僕も静岡へ転校することになった。官舎は、たしか武徳殿の脇で県総務部長官舎の隣だった」



—— 静岡時代の思い出といったらどんなこと? ——

「あまり思い出といっていないが、夏休みの宿題で土佐先生に絵を褒められて貼り出された時はうれしくて、それからあらぬか今でも絵を趣味にしている。本告・苔米地両先生など、人間形成に大いに影響が

あったと思う。

僕は内攻的性格で友達も少なかったが、大村・長岡・居初三君などは交遊があった。中でも居初君のタップダンスは、当時物珍らしさもあってか今でもあざやかな記憶として残っている」

—— 静岡卒業後について ——

「一浪して文内に入ったが、バルト神学に凝って、その研究に没頭し、そのため独語は本職の仏語よりくわしくなる仕末だった。僕は変り種で、大学は千葉医大へ進んだが、試験もそんなわけで独語で受けた」

—— 趣味は? ——

「読書というか、書評を見てドッサリ買い込み、片っ端から読んでいたが、最近では山頭火に熱中している。あとは土佐先生の影響もあって、今でも鉛筆をにぎって山から沢から歩き廻っている」

そう言って、山頂に立つ写真を見せてくれたので、近影を皆に紹介するからと借用して同家を辞した。

一男一女をお持ちで、長女はすでに他家に嫁し、二児をもうけているとの由。長男は現在東京医大に在学中。現在地は東京都北区上十条二二七——七 (庵原)

おもろ

静中のころ

長戸 寛美 (43回)

わが家は、父親が非常にやかましくて、中学に在学の間（中略）小説というものを読ませてもらえなかった。「少年倶楽部」や、妹たちのために買ってあった「少女倶楽部」のような雑誌類は読んでいたが、いわゆる小説と名のつくものとしては、桜井忠温の「肉弾」と徳富蘆花の「自然と人生」の中に収められていた「灰燼」ぐらいしか読んで記憶がない。「灰燼」は、西南戦争余話といったもので、の中に、中野英治と夏川静江の主演で映画化された。

仕方がないから、高山樗牛などの評論ものを主として読んでいた。何年生のときであったか、「成吉思汗は源義経にあらざるの論」などという、つまらない作文を書いたりした。しかし、その後の長い生涯趣味といえは「読書」と言うしか能のない私にとって、当時も本を読むしか楽しみがなかったに違いないから、その閉ざさ

は、その貧弱な知識をたよりに草紙にとりついてみることにした。木版刷りのうえに行書体、草書体が多いから、はじめのうちには、随分、難行苦行であったが、そのうちに徐々に読めるようになり、何しろ絵入り小説だから挿絵による理解も手伝って、終いには、大抵読みこなせるようになった。幸い、読めるはずはないと高をくくっていた父親の干渉からは免がれたのである。

犬塚信乃と浜路の哀れな恋に泣き、勇壮な芳流閣上の決戦に若き血を躍らされたものだ。余談ながら、親がせつ、かちだったのか、子どもの私の方がせつ、かちだったのか、二月早く生まれてしまった八月ッ児の私は、未熟児は「男の児は女の児として、女の児は男の児として」逆で育てると育つという迷信から五歳のお祝いまでお河童に被布を着せられたため、殊に、信乃は無縁には思われなかった。それにしても、伏姫といひ、浜路といひ、沼間・鯉衣といひ、どうして、こう、女のひとは非業に死んだりして不幸なのだろうと、子ども心にも可哀相に思えてならなかった。

ど怖くもなかったけれど、「田舎源氏」の足利光氏と黄昏が道行をして、破れ寺で黄昏が物の怪に襲われる事などあった末に、何を突き、母親の東雲もその後を追って切腹する所などは、のちに耽読するようになった泉鏡花の作品の場面を見るようで、何やら物凄さが感じられた。国貞の繊細な挿絵にも魅せられた。

生まれつきの意地っ張りから、中学時代の新聞小説のほかは小説らしい小説を読まずに終ったが、高等学校に入ってから父親の読書の禁が解けると、文字どおり欣喜雀躍、古今も東西も問わず、小説戯曲の類を片っ端から読みあさった。乱読に次ぐ濫読であった。そうした小説乱読の中にも、江戸文学への志向は根強く残り、後に大学に進んで、徳川時代刑罰史の傍ら「演劇に現われた犯罪と刑罰の研究」をやらかそうと志したのも、少年時代、草紙紙を読んだ、江戸好みの影響であることは否めない。が、世の中は仲々おのれの思うがままにはいかぬものとみえ、検事であった祖父の遺言でその後私は検事の道を進まざるを得なくなったが、かねて望みの、演劇に現われた犯罪と刑罰の研究は、やがて、研究が趣味となり、趣味が道楽と堕したけれど、現在も、芝居の実説を調べたて、それも今に残るものとしては墓ぐらいしかなところから、その墓探しにうつづを抜かしているというの、思えば、かの草紙紙を読んだせいに相違ない。墓といたって、偉人の、孝子というそれではない。火付け・盗っ人・人殺し・心中者に強訴に一揆、仇討でも割の悪い敵討たれの方の墓探し。頼まれもせぬのに千里も一里、目指すお墓を探し当てたときのうれしさは、何に譬ようもない。蜀山人も言う「墓癖」なるこの道楽、おのれが墓に入るまでは到底やみそうにない。これもそれ、幼少に培われたる好き不好き。雀百まで類とでもいうべきか。(弁護士)

コントラスト

おんな親だけだったので中学の初めから大衆・恋愛小説を読みふけた。長戸先輩とはなんたる違い。そして坊主になった。一年生の夏の「愛染かつら」が出だし、「新橋駅」のくだりは空んじた。私の通夜ではなにかの神父たちが「旅の夜風」を歌うことになっている。三年生ごろからは明治・大正文学全集。ませた作文でネコに呼ばれたことも(59期青木静男)

各
期
便
り

五一回

第十八回 靜中五一会が去る六月
十一日 靜岡市浅間神社赤鳥井前の
魚磯プリンス会館で開催され二十
九名の参加者があり、東京からも
原崎郁平君、森弘君、寺尾剛男

席上 静中創立百周年記念事業資金募集に就いて、日頃静岡に於て五一会の世話役をされご苦勞をか

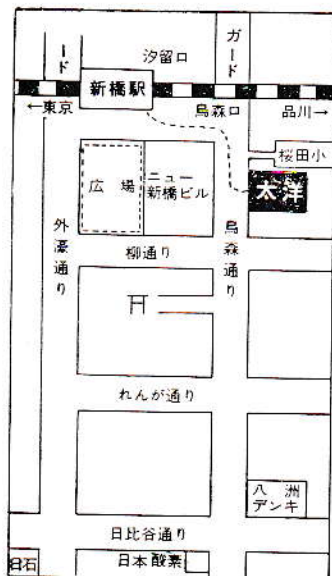
ました由です。斯様に各卒業期の中でもスピードと金額の双方ともトップクラスの成績を挙げ得た事は、五一回の卒業生各位が各界第一線で活躍されて居る行動力が具現したもので、面目躍如たるものがあります。同慶の至ります。

来年は母校創立一〇〇周年記念式典が十月七日開催され、この記念すべき式典の喜びを眼のあたりに見る機を持つことは、卒業生にとって二度とない至福のことであると考えて居ります。(吉井茂)

五四回(12ページ参照)

五九回

少なくとも年に二回は互いに顔を見せ合おうということで、総会



のひけたあとと、秋深くに集ま
ている。今年は十一月十一日、場
所は新橋の太洋。いつも大てい十
五人ぐらゐ。六十人全部に案内状
を出す。出欠の返事は半分ぐらゐ
戻ってくる。欠席でも、是非ゆき
たいがのつびきならない用事で残
念！が大半。あとはなしのつづて。
場所がしょっちゅう変わるのも、出
かけるのにおくうの一原因かと
これからは太洋一本槍でゆく。活
魚料理とうなぎの店。駅の近くだ
から足も便利。なによりもママさ
んが県立出で、三輪君とは小学校
のときからの友だちといふことが
よし。集まりのときに限らず、
いつ寄っても同期のものが誰かは
必ずいる……まさかそこまでは無
理かも知れないが、ゆけば仲間の
動静がすぐわかるように、しやれ
た帳面が一冊おいてある。誰でも
好きなことを書ける。勿論59期以

外の人でも。それにしても今秋は
県立の同窓生と一緒に会をひらく
計画だったが、相手側が先にすん
で？しまったとかでオジャン。こ
のとしては男のほうが工夫なしに
もおくれ？をとるということか。
来年を楽しみに。当夜の出席。加
藤、川田、小花、磯部、長谷川、
清水、三輪、福地、朝比奈、杉本
原、奥沢、青木。（青木静男）

七九回

世は草野球のはなやかかりし、私の草野球を報告します。

小学校・中学校・高校とを通じて内野しかしたことのない私が、やっとピッチャーをやったのが草野球です。大学に入って二、三年後、あるチームに頼まれ、バット片手に出かけました。ピッチャー

不足と過去の経歴から、すぐピッチャーで四番。そしてピッチャーとしての第一球をセンター前に打たれました。草野球の高度さにめをみはり、そのあとは力投し、初登板を完封勝利でかざりました。球友がびっくりするような直球をなげ、ぜんぜんまがらないカーブを投げ、数々の勝利に貢献してきました。

最近の流行におくれまいと、三十にしてピッチャーマウンドに立つようになりました。ハエのとまるような直球をなげ、満のようなカーブを投げるようになり、また、エースで四番です。盗塁をすれば肉離れをし、全治三週間でした。秋の夜ながをグラス片手に太った腹をさすっています。では、

（上田尚亮）

ハイキング

十月十六日(日)また一つの新
しい試みとして奥多摩の入門部方
面にハイキングをやった。全くの
快晴。九人そそこの参加者だと
きいていたが、十時、武蔵五日市

老い、若きとりまぜといった感。どんな人が来るのか、蓋をあけて見なければわからないので、世話役もプランをたてにくかったが、ともかく一応きめたところにむかって歩きだし、登りだして見ることにした。

上養沢までバスで三十分、目的



秋川ハイキング

於日の出山頂上

地は日の出山。登山口の案内板を見ただけで「とても駄目だ」「もの足りない」などとはやくもめた。登山というよりは、お浅間さんの百段をのぼるようなもの、途中の鐘乳洞まで来て六人ほどが、「もう結構」という事になった。

行程にして三分の一ぐらいのところか。急に調子づくものもいて、大半は更に登りだしたが、おのづから一足先に帰る「残念組」とあるまでやる「完遂組」との二つに分れることとなった。「残念組」は時間も充分にあるところから、

鐘乳洞を見物したり、ゆっくり弁当を食べたり、なかにはさっそくチビリチビリやるものも出た。

「完遂組」には赤ちゃんを背負って登る人もいて元気なところを披露した。石段ばかりというわけでもなく、とにかく標高千メートル近くの山にのぼったのだから、まアまアのハイキングだったといえる。「早組」は帰途、岸辺あるきなども加えて第二ラウンドと気取った。二つの組がこれでなきわかれになったわけではない。帰りしなに秋川の畔のロッジで「鉄板焼」としやれこみ「遅組」と再び会うことになっているのだ。59期青木君の世話で、カトリック教会の施設「秋川荘」の広間を占りようした。

「早組」は肉など焼きあげて、仲間を待とうという殊勝なことであつたが、はやばやと一杯やつたため御機嫌になるとともに面倒になって気持だけ。そうさく願いを出そうかなどと冗談をいつているうちに「遅組」の到着。鉄板台を三つ囲んで飲み食いのはじまる。自己紹介や奇遇の喜びあいや唄など。あとはおして知るべし。ビールの追加を注ぎたり、残った食べものを出しあったり、おそくなる旨、家に電話したりで誰も帰る

うとするものなし。秋の日の暮れるのも知らず、気がついたときは外はまっくら。

それでも一人千円、子どもはロヘ。残った分は各人に数葉づつ配るスナップ写真代にあてるなどの余裕もみせた。また来年の声で解散は七時ごろ。みな無事に家に着いたかどうか。(青木記)

ゴルフ

去る十月六日、秋晴れの好天に恵まれ、安田正弥氏(66回)の御好意により、伊豆大仁カントリークラブ天城・箱根コース・18ホール・パー27に於て、第三回印高会(静岡静岡東同窓会ゴルフ会の愛称)ゴルフコンペが、参加者27名、特に今回は安田夫人、後藤弘枝女史(71回)の応援参加もあり和気満々の内に行なわれました。

競技の結果を御報告申し上げます。優勝・望月成能君(72回) TOTAL 85、H・D 14、NET 71 ベスグロ、ドラコン共、準優勝、石本明君(70回)ドラコン共、第三位、小林泰三君(68回)、ニヤビン・萩原将弘君(61回)山田恒男君(70回)佐々木政之君(70回)岩波勝弘君(42回)岩波信平氏(長男)老雄石割正氏(38回)もTOTAL 107で堂々第九位入賞。

江の島会

(67回幹事記)

十月二十二日、恒例の江の島会が新装成った江の島「あびす屋」大広間で催された。

秋晴れの好天、潮風も爽やかな江の島に李家会長以下神奈川在住の同窓生及び柳川関東同窓会副会長他幹事が集り、来賓に鈴木同窓会々長、鈴木同幹事長及び吉川母校々長等を迎え会計四十二名の賑やかな会となった。中に紅一点七一回の後藤弘枝さんが満緑叢ならぬ白髪中に華やかな彩りを添えてワジサマ達を喜ばせた。

三時半開会、李家会長及び来賓の挨拶に続き最先輩三四回原武夫氏の音頭で乾杯懇親会に入った。途中会場あびす屋会長三五回の永野清氏に対し新築及び本日の初使用を祝して同級生畔柳安雄氏が会を代表して花束を贈り永野氏よ

なお第四回大会は来春の予定ですが、コースその他の都合で過去三回共平日行っている為か、参加者が限定される傾向にありますので、皆様の御協力を得て、何とか休日開催をと考えております。より多くのゴルフ愛好者に御参加願える為、良いお知らせがありましたらぜひ幹事迄お聞かせ下さい。



江の島会 於あびす屋

り謝辞があり拍手を浴びた。
余興に入って四二回の井出先輩
の年号入一高寮歌集、高山樗牛平
相国論の暗称。さては村松幹事の
ジュスチャー付流行歌から奇術

(ほんとに「奇」でした)に至
る実演入余興教室に、若き後輩連
中少々毒気を抜かれた態。
会は愈々興に入り、時間を忘れ
て、六時の予定(案内状には特に

「時刻及び時間厳守」とありまし
た)が七時となり、例により井出
応援団長・望月コンダクターの指
揮で校歌を大合唱、続いて万才三
唱を行って解散した。
この後、同級会・二次会等々盛
であった由。(五三回月見里記)

声

支部ができて三年になります。
親睦の催しも世話人の活躍でそれ
なりの効果をおさめ、その他の足
どりも定着しつつありますが、同
時に色いような批判もあるのではな
いでしょうか。ゴルフ・麻雀・釣
りも結構ですが、もっと一般人の
が楽しんだり或いは女性や家族ぐ
るみのことも考えての企画など、
その他みなさまの声をおよせくだ
さい。

その後の支部活動

六月三日 総会

総会記事は別掲の通り

七月八日 幹事会

トップバンムーアに三十五名集合。

総会報告の後本部の今年度事業の
一つである支部助成金の取り扱い
について審議した。

関東同窓会としては先年来同窓会
全体の会費体系と徴収方法につい
て問題提起して居た所であるが、

支部助成金を求めている訳ではな
いので、その取り扱いについては
辞退すべきである等の強硬意見が
あり熱心に討議した。

結論としては本部との間に首脳会
談を行って当方の真意を理解せし
める事に努め、その結論を待つて
取扱う事とした。

次で懇親行事として秋季ゴルフ会
等の実行を決め、ゴルフは大仁C
・Cにて行う事とした。又、新名
簿・会報の発送を打合せた。

九月九日 幹事会

トップバンムーアに三十三名集合。
先日四三回幹事山内良之氏が逝去
された事に関し同回幹事西沢純三
氏より報告があり一同黙祷して冥
福を祈った。

宮沢会長出張中の為柳川副会長よ
り挨拶があり、会報第四号の発行
に関し報告及び原稿依頼があつ
た。次で懇親行事の十月十六日の
ゴルフ会及び十月十六日のハイキ
ング会の計画説明があり、釣の会
の提案があつたが時期的に無理が
あるので来年とした。

又、村松監事より十月二十二日開
催の江の島会について説明があつ
た。

十月六日 ゴルフ会

十月十六日 ハイキング会

以上の詳細別掲の通り。

計報

四三回の代表幹事であり、本会
設立当時から御尽力下さいました
山内良之氏は、病気の為入院中の
所、八月二十日残念にも逝去され
ました。

謹んで御冥福をお祈りいたし
ます。

おわび

前回の会報第三号で「なかま」
欄「統竜爪会のこと」の執筆者名
加納敏氏は狩野敏氏の誤りでし
た。謹んでおわび申し上げます
と共に訂正致します。

編集後記

今年も残り少なくなりました。
もう来年の事を言っても、という
訳で、今回は百年祭と故郷特集に
して見ました。皆様のお声を伺い
度いと存じます。

今回も亦庵原、青木、飯田、上
田の各委員の方々に御尽力頂きま
した。御礼申し上げます。

会報(第四号)

昭和52年12月15日 発行

編集人 月見里得知郎

発行所 静中・静高

印刷所 関東同窓会

印刷所 庵原印刷所

同窓会コンペなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ

伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石橋正秋

取締役支配人 安田正弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1

TEL 0558-76-2401 (代表)

ギンガ印スポーツ用品総発売元

株式会社 北村スポーツ

常務取締役 川上剛二 (67回)

東京都中央区東日本橋2-10-3

TEL 03-863-2931 (代表)

宝石直輸入元

株式会社 貴信貿易

代表取締役 土屋博 (67回)

東京都台東区上野5-18-4

ダイヤオフィス6階

TEL 03-835-3785 (代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67回)

東京都中央区八丁堀2-1-7

神鋼ビル

TEL 03-553-8981 (代表)

建築設計・管理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成岡英彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル

TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈正三 (67回)

東京都中央区銀座1-15-6 銀座NSビル4階

TEL 03-563-1921 (代表)

米国事業部

イリノイ州シカゴ市ウエストスクール街2031

ジャパンビジネスサービス社内

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野孝 (53回)

取締役社長 奥野進 (56回)

取締役副社長 吉川善吉 (56回)

本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

TEL 03-842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施工業務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長 奥野孝 (53回)

取締役営業部長 奥野広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-834-5331 (代表)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱函病院

院長 小坂博 (67回)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

店舗内外装工事

店頭広告全般

東洋テルミー株式会社

営業部長 塩沢俊 (67回)

東京都中央区日本橋浜町2-9-5

TEL 03-667-7551 (代表)

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮澤次郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6
TEL (295) 2411 (大代表)

鈴与株式会社

取締役会長 鈴木与平 (44回)

清水市入船町3丁目12
TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講談社

取締役社長 野間省一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945) 1111 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1
TEL (833) 2111 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京華商会

取締役社長 岡本敏興 (32回)
専務取締役 今関智吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241) 7751
分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211) 7831
大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内
TEL 06-201-3224

株式会社 東電社

取締役社長 岩波信平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL (271) 2701 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀豪三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル
TEL (571) 8641 (大代表)

本田技研工業株式会社

取締役副社長 川島喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役副社長 大石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2311 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井平一郎 (57回)

本社 静岡市国吉田645
TEL 0542 (62) 1111 (代)
東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル
TEL 03 (272) 4651 (代)